

# 幼な兎のことばから



鈴木正子

## 幼兎のことは記録ノートより

○  
ぼくのうちはアパート

アパートは雨がふるとあかくなる

それで雨がやむと

ももいろになる

アドバルンもあがってる

たかくてなんでもみえる

A・Y (四月)

入園したてのAちゃんのはなしである。途中まで送って行った

私をみあげながらA君は家の話に余念がない。いわれてみれば、

もも色をしたアパートはほんとうに色が変わる。A君はよくみて

いる。A君の観察のこまやかさにおどろかさされる。

○  
めをつぶったら

うちのおかあさん

わらっていたよ

L・K (五月)

母の日に近いある日、みんなでお母さんの絵を画いた。Lちゃんはぎゅっと眼をつむってなにか考えていたが、ふとこんなことを言う。どこにいても、いつも自分をみていてくれるお母さん。いつもわらいかけてくれるお母さん、大好きなお母さんへの思慕の気持が、このことば一ぱいにあふれていてうれしい。

○  
ほうせんかの種子取りの日に

わっ ばーんとはねやん ぴーんとはねやん

T・Y

うんとでぶのがいい　ぶどうがでてきた

U・S

あっ　たまげた　とびつくんだもの

N・A

いつのまにか　てがまっかになつた

あせが出てきた

U・S

かぼちゃができた　かぼちゃができた

ほんともたい

M・W

はねた　くちのなかに　はいりそう

ピーン　バーン

M・W

はねるかな　あけてみなくちゃ　わかんない

T・N (十月)

秋晴れの庭は、ほうせんかの種子取りをする子どもたちでにぎやかだ。おもいおもいのことを言いながら、はねる種子をこぼすまいと、しんけんだ。

ふぎけんぼうのT君、りくつ屋のN子ちゃん、少々憶病なN・A君、それぞれ、それらしいことを言いながら取っている。

くるりと皮がまるまって、仁丹のような種子がとび出す。活動的な、ほうせんかの種子取りは子どもたちを有頂天にさせる(こんな時はふだん、しゃべらない子どもも心の窓をおしひらく。あとで、テープレコーダーでもかけておいたら良かったかしらと想う程。全部の子どものことばを書きとめられなかったのが残

念である。)

○

お天気のいい日はね

しろい犬の毛が

すぐくひかるよ

ビスケットやると

バリバリたべる

H・N (十一月)

給食をいただきながら、H子ちゃんは犬がすきでよく犬の話をしてくれる。白い犬が眼にみえるようで、お友だちもたべるのをやめてつい聞きほれてしまう。N子は本当に話上手だ。

○

あたしはせんせいとまっすぐ

あたしは花とまっすぐ

あたしは○ちゃんともまっすぐ

給食の時の先生のすわる場所は幼児の大きな関心事である。彼らはだれも先生を自分の机に来させたがる。その机にすわればその机の子は「あたしはせんせいとまっすぐ」だと胸をつき出してよろこぶ。他の机の子は負けじと花と真っ直ぐだとか、お友だちとまっすぐだとか負け惜しんでいる。毎日先生は順ぐりに机を訪問しては、全部の子どものたと、真っ直ぐにつながろうと努力している。

○

1 うさぎのこ  
もくもくしてるよ

うさぎさん

2 うさぎのこ

あかいおめめ

うさぎさん

3 うさぎのこ

おつきさまから

とんできた

4 うさぎのこ

まるまるしてるよ

うさぎさん

5 うさぎのこ

かわいいかわいい

うさぎさん

6 うさぎのこ

ちゅくちゅく

おっぱいのんでいる

7 うさぎのこ

びよんびよんしてる

うさぎさん

### しろぐみうさぎのうた



- 1. うさぎのこもくもくいておめめからとんできた
- 2. うさぎのこあおーるまわ
- 3. うさぎのこおーるまわ
- 4. うさぎのこあおーるまわ
- 5. うさぎのこあおーるまわ

8 うさぎのこ

おみみがながい

うさぎさん

9 うさぎのこ

ちいさいちいさい

うさぎさん

(一月)

うさぎ小屋の前でAちゃんが言ったことばをとらえて、そこにいた二、三人の子どもたちと即興でうたってみる。室にかえって来てからもうたっている、みんなが集まったところで「二番うたえるかしら」と誘うと、Bちゃんがすぐ入ってくる。「三番もあるよ」とCちゃんも歌う。四番五番とたちまち出来る。

忘れないようにと黒板にかきつける。もちろんこれは私のおぼえだが子どもたちは 長いな 長いな と字のかずをみておどろいている。字に興味をおぼえはじめた子どもはひろいよみをしてよろこぶ。いちばんおしまいに「白組 うさぎのうた」という題をつける。

これは昨年卒業した子どもたちが残していったうた。私は今でも時々この長いうたをとり出してはあの無邪気な即興詩人たちをなつかしんでいる。これからもたくさんこんな歌を作りたいと思う。

せんせいねえ

しろいとりは しまのとより

おりこうだね

しまのとりはね

えきやろうとしたら

つくーん つくーんて

かかってきたよ

M・M (十月)

うきぎ小屋のとなりには、にわとりの小屋がならんでいる。台所から出た野菜のくずを毎日のように持って来ては、とりを訪問していたM君のある朝の訴えである。「つくーん つくーん」とは幼児でなくては出来ない表現である。

○  
きつねがいじわるしたってもき

つるはしなればいいのにね

ひらべったいお皿で

やればよかったのにな

M・S (一月)

イソップ童話「つるのごちそう」を聞いたあとのM君の感想である。M君は日頃からたいへん気持のやさしい子どもなので、意地わるをされても、しかえしなどせず、親切にしてあげた方が良いと想ったのだろう。Mちゃんのやさしい心にしみじみとさせられる。M君はよくお話などを聞いたあと、そのお話について感じたことや考えたことを話す。こんな態度を他の子どもたちの身にもつけさせたいと想いながらこのことを記録する。

○  
赤城やまあ

とんでこーい

あるいてこーい

やってこーい

N・T (二月)

晴れた日の冬の山は手ごとときそうに近くて美しい。でもたやすく行くことは出来ない。田圃のあぜに立ってH君は大きな声で山をよんだ。

想わず流れ出た感動の声である。

○ ○

おしまいに

幼児たちの感受性は豊かで鋭い。そしてその表現も自由なのでびやかである。

それは時におとなの追従を許さぬ程である。「このすばらしい芽を知らぬ間にふみにじっていることはないか」私は幼な子たちのこうしたことばにふれるたびに、はっとして考えさせられる。

そして育てることの責任の重さを、想わせられるのである。

(群馬大学付属幼稚園)